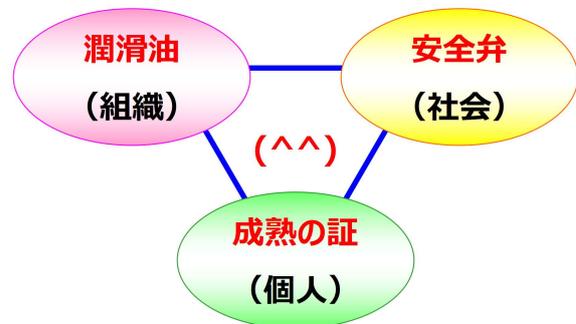


「笑い」の効用

企業経営漫談士 岡野実空

別コラム「ミドル・クライシス」②で取り上げる、ミドルの「よ・わ・み」(余裕・笑い・魅力)のど真ん中に位置する「笑い」。それは唯一笑う動物として、「人間力」の大切な要素であるだけでなく、集団としての組織や社会にも必要不可欠なものです。とはいえ、年齢や性別、教養の有無、場面や状況などによって、「笑い」もさまざま。今回はその中から、「ジョーク」「ユーモア」「ウィット」など、外交評論家・加瀬英明氏のいう、「頭の砥石」としての知的な「笑い」の効用を考えます。(彼の祥伝社新書『人生最強の武器・笑いのカーユダヤ人の英知に学ぶ』は、笑わない生まじめミドル必読)。

KME-12 「笑い」の効用



効用1:成熟の証(個人)

「自分」をネタにして、他人から「笑い」が取れるか否かは、人間の成熟度の分かりやすい指標。吉本系の自虐ネタまで行くと、ミドルとしては少々行き過ぎですが、自分の言動を他人の目で眺め、その特徴を冷静に分析できるのは、人の上に立つための重要な資質の一つ。それは、他人と異なる性格や思考の自覚であり、自分のありのままを開示し、謙虚に他人の協力を仰ぐことができる証でもあります。このような、知的な「笑い」を生む「頭の砥石」の素材は、もちろん豊かな「教養」です。

ゴルフ外交に勤しむ現日米両首脳は、その究極の反面教師。お互いを「鏡」にすれば、彼らが望む姿に近づけるのに、真逆の「鑑」にして墓穴を掘り合い、知的な両国民の「冷笑」を誘います。そんな時間があつたら、本でも読み、「汝自身を知れ！」。

ここで、私の事例を。鵜飼の鵜は首を縛られ、自分の胃には小さな魚しか入らず、獲った魚の過半は鵜匠のものになります。結婚してから約30年、私は「鵜」でした。(自虐ネタか?)

効用2:潤滑油(組織)

自虐ネタの笑いでは、他地域の追従を許さない関西人を対象にした調査で、ストレス要因のトップが、「人を笑わせねばならぬ」には大笑い。他人のミスを見て笑うのは、自分が「優越感」を持つからです。それは競争社会が生む個人の緊張感を緩め、私たちの心身の健康に貢献します。しかし、企業間の競争の時代にいる私たちが目指すのは、個人間の「優劣」によるものではなく、平等で民主的、かつ知的で品の良い「笑い」です。

例えば、トップの訓示が「ユーモア」を含めば、個人の士気が自ずと高まり、その雰囲気も周囲にも伝わって、組織の「相乗効果」を促進します。いま、命令調の訓示は全く逆効果ですが、右肩上がりの時代に育った「旧世代」の大半は、それがまったく

理解不能。相変わず、硬い上意下達を繰り返して、組織の墮落と退廃を招いています。それがもたらすのは、「相乗効果」ならぬ「相乗降下」。(同音なので、口頭では「相乗劣化」)

効用3:狂気の安全弁(社会)

「このような時代において、笑いは、狂気に対しての安全弁になるのです」。映画『独裁者』で、ヒトラーに単身立ち向ったチャップリンの言葉です。総統が恐れたその作品は、ユーモアという武器で、いまなお「ヒトラー的なもの」と闘い続けています。そのため、笑いネタ満載の独裁国家では、いまも放映禁止。かつてソ連。いま北朝鮮、そして中国?

しかし、私たち周辺に、「狂気」はいくらでも存在します。「個人が正気を失うのは稀である。しかし、集団や党派、国家、そして時代の場合は、それが常である」。19世紀末に亡くなったニーチェが、次の世紀を見ていれば、それに間違いなく「企業」を加えたでしょう。

健全な「笑い」のない職場が失っている「正気」。それは企業滅亡への一本道です。個人、組織、企業、そして国家も、「笑う門には福来る！」

2019年8月17日(初出平成29年11月20日) 実空